


1 作 物

項 目	作 業 内 容
(1)普通期水稲の穂肥	<p>(今月の作業のポイント)</p> <p>普通期水稲の穂肥 水稲の水管理 早期コシヒカリの収穫・乾燥・調製 水稲の台風対策 水稲のいもち病防除 大豆の灌水 大豆の病害虫防除</p> <p>普通期水稲の穂肥は、出穂前 20～25 日を目安に施す。施用量は 10 a 当り成分量で、窒素はヒノヒカリが 3 kg、愛のゆめと松山三井が 4 kg、加里はそれぞれ 4 kg とする。収量・品質の低下を防ぐため、穂肥は適期に適量を確実に施用することが重要だが、多量の穂肥や実肥は食味の低下に繋がるので注意する。</p> <p>また、ヒノヒカリは弱勢穎花の稔実が悪く、未熟粒や乳白粒が発生しやすい品種なので、弱勢穎花の着生を抑えるため、他の品種よりやや遅らせて出穂前 18 日に施肥する。</p> <p>穂肥適期をこれまでの生育から予測すると、平坦地域の 6 月中旬田植えの場合で、ヒノヒカリと愛のゆめは 8 月第 1～2 半旬、松山三井は第 2～3 半旬頃である。</p>
(2)水稲の水管理	<p>早期栽培のコシヒカリや早植え・短期栽培のあきたこまち等は登熟期を迎え、この時期の水管理は間断灌水を基本とする。しかし、8 月上中旬は年間で最も暑い時期であり、平均気温 28、最低気温で 23 を超えるような高温が続く場合、水の豊富な地域では、かけ流し灌水で根の健全化を図り、登熟低下を防ぐ。また、登熟期の高温による品質低下は土壤の乾燥で助長されるので、決して乾かさないようにする。</p> <p>また、収穫期前の落水時期はできる限り遅くし、土壤条件にもよるが収穫前 5 日を目安に落水する。</p> <p>普通期水稲では、最も水を必要とする幼穂形成期から出穂・開花期を迎えるため、決して土壤を乾燥さないように管理し、高温時には、水の豊富な地域ではかけ流し灌水で根傷みを防止する。</p>
(3) 早期コシヒカリの収穫・乾燥・調製	<p>早期栽培コシヒカリの収穫適期の目安は、出穂後の積算温度で 900～1,050 程度、生育が平均的な株の最長稈黄変劣率で 75% (生育均一な株の最も長い個体の穂で調査する)、籾水分で 30% 以下になった時期、出穂後の日数では 33～37 日頃である。</p>

項 目	作 業 内 容
(4)水稲の台風対策	<p>30%以下になった時期、出穂後の日数では33～37日頃である。</p> <p>今年の出穂期はほぼ平年並みであるが、本県の水稲はやや刈遅れる傾向にあるので、圃場観察（最長稈黄変籾率）や籾水分調査等で適期刈り取りに努める。</p> <p>また、早期栽培水稲は収穫時が高温期で、しかも籾水分が高いために品質が低下しやすいので、特に次の点に留意して乾燥・調製する。</p> <p>ア 生籾の長時間堆積(4時間以上)は品質低下となるので、速やかに乾燥する。</p> <p>イ 乾燥温度は穀温40以下とする。</p> <p>ウ 毎時乾燥速度(乾減率)は平均0.8%以下とする。</p> <p>エ 過乾燥を防ぎ、仕上がり水分は14.5～15%を目標とする。</p> <p>オ 高水分籾(25%以上)は水分ムラが多いので、通常の熱風温度より5程度低い温度で乾燥し、水分20%以下になってから通常の熱風温度で乾燥する。</p> <p>カ 籾摺・調製に当たっては、機械の事前点検や適正使用により肌ズレ等の品質低下のないように注意して作業する。また、品質を高めるため、必ず1.85mm以上の篩目を使用し、整粒歩合80%以上に調製する。</p> <p>今年はすでに2つの台風が本県に接近し、麦や水稲に被害をもたらした。8月は四国地方に接近する台風が最も多い月であり、水稲への影響が心配される。台風襲来時には次のような事前事後対策を徹底する。</p> <p>ア 台風が接近したときは、事前にできる限りの深水にして通過に備える。ただ、警報や注意報に十分留意し、無理な水管理は行わない。</p> <p>イ 塩水が水田に流入した場合は、早急に真水の掛け流しを行って土壌中の塩分濃度を0.5%以下に下げる。</p> <p>ウ 潮風害を受けた場合は、動噴等を用いて早急に稲体に付着した塩分を真水で洗い流す。</p> <p>エ 台風通過後も強風が吹く間は深水とし、風が止んでから浅水管理にする。</p> <p>オ 台風通過後は白葉枯病、いもち病、ウンカ等の病害虫防除を行う。</p>

項 目	作 業 内 容
(5)水稲のいもち病防除	<p>今年はずでに県内の一部で葉いもちが確認されており、8月は平年に比べ気温が低めで天候がやや不順であるとの予報から、本病の発生に助長的である。また、今後本病への感受性が高まる時期も重なるため、本病に弱い品種や常発地では発生・拡大が懸念されるので、次の点に注意して防除する。</p> <p>ア 置き苗は、地域ぐるみで早急に処分する。</p> <p>イ 圃場観察や発生予察情報などで本病の発生に注意し、病斑を確認したらフェリムゾン・フサライド等の治療効果の高い剤で防除する。</p> <p>ウ 穂ばらみ期に他の病害虫との同時防除を徹底し、その後雨が多いときは穂揃期にも追加防除する。</p> <p>エ いもち病は窒素過多条件で多発するので、過剰な窒素追肥は控える。</p>
(6)大豆の灌水	<p>大豆は要水量(乾物1g生産するのに必要な水量)が比較的高い作物で、特に開花期以降は蒸散量の増大に伴って多量の水が必要となる。この時期の土壤水分不足は、着莢が低下したり不稔莢が多くなって収量が低下するばかりでなく、栄養成長と生殖成長のバランスが崩れて落葉が大幅に遅延するなどして収穫も遅れることになる。開花が始まったら収量向上のために積極的に灌水する。特に開花期以降に7～10日以上無降雨が続く場合や最先端葉が立ち上がって反転して白く見える様な場合(写真1)は必ず畦間灌水を行う。なお、高温時の灌水は根傷みを起こすので、朝夕の涼しい時期に実施する。</p>  <p>写真1 先端葉が反転して灌水の必要な大豆</p>

項 目	作 業 内 容
<p>(7)大豆の病害 虫防除</p>	<p>ア ハスモンヨトウ 今年の発生は今のところ多くないが、例年8月中旬以降被害が拡大するので、フェロモントラップによる発生予察に努める。また、孵化直後幼虫が群がって加害している「白化葉」を確認したら、その摘取りを行うとともに防除を開始する等、若齢幼虫での防除を基本に、白化葉の早期発見、早期防除を行う。また、薬剤抵抗性が発生しやすいので薬剤のローテーション使用を行う。</p> <p>イ カメムシ類 着莢不良の最大の要因であり、防除を怠ると収量低下が著しいばかりでなく、「青立ち大豆」(収穫期になっても青く落葉しない個体)で、収穫時の品質低下の要因になるので、開花期～子実肥大期にかけての防除を徹底する。</p> <p>ウ 紫斑病 紫斑粒の発生により品質を著しく低下させる紫斑病は、徹底した防除が必要であり、子実肥大期、特に開花後30日前後を中心とした防除に努める。</p> <p>なお、本県では本病菌にベンズイミダゾール系薬剤(トップジン剤、ベンレート剤等)の抵抗性菌が確認されており、これらの薬剤は効果が劣ることが考えられるので、系統の違うゲッター剤やベルコート剤を使うのが望ましい。</p>

(作成 農林水産研究所)